慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』初稿 (1821年) : 翻訳の試みと覚書 (3)
Sub Title	J.W. Goethe: Wilhelm Meisters Wanderjahre (I. Fassung). Übersetzung und Anmerkungen (3)
Author	山本, 賀代(Yamamoto, Kayo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.60 (2020.) ,p.35- 59
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20200331-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』初稿（1821年）
――翻訳の試みと覚書（3）――

山　本　賀　代

試訳[1)]

第5章[2)]

モンターンが近くにいるという知らせにヴィルヘルムは悩んでいた。こ

1）翻訳の底本にはJohann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche*. 40 Bde. Hg. von Hendrik Birus u.a. Frankfurt am Main 1987–2013 [=FA] のBd. 10 *Wilhelm Meisters Wanderjahre*. Hg. von Gerhard Neumann u. Hans-Georg Dewitz. Frankfurt am Main 1989 [=FA10] を使用し，本書の詳細な解説・注釈とともにJohann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens*. Hg. von Karl Richter in Zusammenarbeit mit Herbert G. Göpfert u.a. München 1985–1998 [=MA] のBd. 17 *Wilhelm Meisters Wanderjahre. Maximen und Reflexionen*. Hg. von Gonthier-Louis Fink, Gerhart Baumann und Johannes John. München 1991 [=MA17] を常に参照した。今回訳出した範囲はFA10, S. 43–59。脚注には，主として2稿との異同（明確な変更箇所はアンダーラインで示す）や，執筆・改作過程に関する情報を記した。ただし引用符の有無，コンマ・コロン等の記号の変動や正書法の修正・変更については省略した。以下，作品名は『遍歴時代』と略す。

2）2稿では第3章冒頭のヴィルヘルムのナターリエ宛て書簡の直後に続く。FA10, S. 287.

んなに大切な友人との再会をただ偶然に委ねてしまうわけにはいかないと，彼は，旅人はどちらの方向へ向かったのかと主人に尋ねた。しかし詳しいことは誰も知らなかった。しかたなく本来の計画どおりに遍歴を続けようと決意したとき，フェーリクスが大きな声で言った，「お父さんがそんなに気むずかしくなければ，ぼくたちはきっとモンターンを見つけることができるのにな。」「どうやって？」ヴィルヘルムは尋ねた。「小さなフィッツが，昨日，言ってたんだ。美しい石を持ちあるく石に詳しい男なら，きっと探しだすことができるって」とフェーリクスは応えた。二，三の問答の末，ヴィルヘルムはついに，フィッツに任せて試してみよう，しかしそのあいだはいっそうこの怪しい少年には油断するまいと心に決めた。少年はまもなく発見され，連れてこられた。目的を聞いていた少年は，槌とたがね，立派なハンマーに小さな袋を携え，鉱夫らしい格好で元気よく先頭に立って進んでいった。

道はわきにそれ，再び登りになった。子どもたちは一緒になって岩から岩へ，株も石も，小川も泉も飛びこえていった。目の前に道がなくなると，フィッツは右を見て左を見て，そして勢いよく駆けあがっていった。ヴィルヘルムととりわけ荷を背負った人夫はそんな速さにはついていけなかったので，少年たちは道を何度も行きつ戻りつし，歌ったり口笛を吹いたりしていた。はじめて見る樹木の姿がフェーリクスの注意をかきたてた。彼は今，から松やスイス松を間近に眺め，美しいリンドウの花に魅せられた。このように，転々と場所を移る困難な山歩きにも楽しみがないわけではなかった。しかし突然，彼らの目の前に鹿砦が立ちはだかった。それは嵐になぎ倒され無残におり重なっていた。「こんなはずじゃなかったんだ」とフィッツは言った，「ぼくが戻るまで，ここで待ってて。あそこの洞穴には注意してね！　誰も入っちゃいけないんだ。近よるだけでも，ひどい目に遭うんだよ。」少年は洞穴とは反対方向に離れていった。一方で人夫は，いつもと違う面倒な道程にぶつぶつ言いながら背中から荷物を下ろすと，わきや下手に人が通った道がないか探しはじめた。

父とふたりきりになるや，フェーリクスの好奇心が頭をもたげ，すぐさま洞穴にそっと近づこうとした。様子を見ていたヴィルヘルムは，しばらくして少年が見あたらないことに気がつき，自分も洞穴の方へと向かった。その入り口付近にいる子どもを見たのが最後だったのである。入ってみると洞穴は空洞で，広大だが全体を見わたすことができた。別の出口を探してみたが，見つからなかった。事態は深刻に思われた。そこで彼は，ボタン穴に吊っていた小笛を手にとった。彼の笛の音に対して洞穴の奥から応える響きが聞こえてきたが，それをただのこだまと考えるべきなのか，彼にはわからなかった。しかしその直後，フェーリクスが大地から首を出した。まさに大地からという表現が相応しかった。というのも彼が現れた岩の裂け目は，彼の頭ひとつ分の幅ぎりぎりだったのである。「そこで何をしているの？」父親は叫んだ。「静かに！」フェーリクスは言った，「お父さん，ひとり？」「誰もいないよ」とヴィルヘルムは返した。「じゃあ急いで，ぼくに丈夫な丸太を何本か持ってきてちょうだい」少年は叫んだ。ヴィルヘルムは猟刀を使って，風で倒れた樹木から二，三の太い枝を調達してきた。フェーリクスはそれを受けとり，「誰も洞穴に入れちゃだめだよ！」と父に声をかけると，姿を消した。

しばらくしてフェーリクスは叫んだ，「もう二，三本，丸太をちょうだい，もっと長いのを！」父親はそれも用意してやり，この謎が解けるのを楽しみに待った。とうとう少年が裂け目から勢いよく飛びだしてきた。彼はひとつの小箱を持ちかえった。小型の八つ折り本ほどの大きさで，美しい装飾の古そうなものだった。金製らしく，エナメルで細工が施されていた。「お父さんが隠しておいて！　誰にも見せちゃだめだよ」と少年は言った。ヴィルヘルムにあれこれ質問する時間はなかった。というのも，戻ってきた人夫の声が聞こえてきたからである。そしてふたりがこの男に合流すると，あの小さな少年が小高いところから声を出して合図をしていた。

三人が少年のところに行くと，彼は叫んだ，「モンターンは近くにいるよ。まもなく会えるって賭けてもいい。」「どうしてそんなことが言えるん

だい」ヴィルヘルムは尋ねた，「人の気配もないこんな鬱蒼とした森のなかで？」「そこはぼくに任せてよ」とフィッツは返すと，まるで鬼火のように，雇い主たちに最善の道を案内しようと右へ左へと飛びまわった。

発見した宝物に夢中になり，秘密をもつことに有頂天だったフェーリクスのほうは，これまでのように友だちに一生懸命ついていくことはせず，父親のそばに寄りそっていた。彼は父親に目くばせして合図をおくり，小さな仲間のあとを追いながら，顔をしわくちゃにして，今では自分のほうが少年よりも優位にたっていることをほのめかした。なにしろ自分は秘密をもっていて，少年はそのことを何も知らないのだ。その態度がついに目にあまり，父はフェーリクスに忠告した。「ねえ，秘密を守りたいなら，秘密があることに気づかれないようにしないとね。隠していることで悦に入っていると，隠していることをばらしてしまうことになるよ。」フェーリクスは気をつけようとしたが，友だちに対する朗らかで腹蔵ない態度を取りもどすことはもはやできなかった[3)]。

小さなフィッツは突然立ちどまると，聞き耳をたてた。彼は他の者たちを呼びよせ，「とんとん叩いているのが聞こえるかい？　岩を叩くハンマーの音だよ」と言った。「聞こえる」と他の者たちも応えた。「あれ，モンターンだよ」フィッツは言った，「そうでなければ，彼の居場所を知っている人さ。」ときどき繰りかえされる音のあとを全員で追うと，森のなかの空き地に出た。そこには切りたったむき出しの岩が他を圧倒する高さでそびえ，背の高い森すらも深く見おろしていた。その頂きに人影が見えた。遠すぎて，誰なのか見分けることはできなかった。険しい小径を子どもたちはすぐによじ登りはじめた。ヴィルヘルムは苦労しながら，それどころ

3）下線部はすべて 2 稿ではカット。ただし，フェーリクスがひとりで洞穴に入りこみ，小箱を発見するエピソードは，2 稿ではヤルノーと再び別れた後の巨人の城の場面に移され，「誰も洞穴に入れちゃだめだよ！」から「『誰にも見せちゃだめだよ』，と少年は言った」あたりはほぼ同じ文章が採用されている。FA10, S. 302.

か危険を感じながらついていった。いつだって最初に岩を登る者のほうが安全である。先を行く者は自分に都合のよい場所やタイミングを探しねらうが，あとからついていく者は，前の者がどこに到着したかはわかっても，どのように辿りついたかはわからないからである。少年たちはまもなく頂上に到着し，ヴィルヘルムには彼らの大きな歓声が聞こえてきた。「ヤルノーさんだよ！」フェーリクスは父親に向かって叫んだ。続いてヤルノーが険しい岩場に踏みこみ，友に手を差しのべ，彼を引きあげた。ふたりは抱擁し，大空のもとで感動のあいさつを交わした。

しかしふたりが身をほどくや，ヴィルヘルムはめまいに襲われた。それは彼のせいではなく，子どもたちが恐ろしい谷底に身を乗りだしているのが見えたからである。ヤルノーが気づき，ふたりにすぐにしゃがむように命じた。「思いがけない広大な光景を前に自分たちの小ささと大きさを同時に感じるとき，めまいがするのはまったく当然だ」と彼は言った，「そもそもめまいを覚えるようなところでなければ，本当の楽しみは存在しないのだがね。」

「あの下にある大きな山が，ぼくたちが登ってきたところなの？」フェーリクスが尋ねた。「なんて小さく見えるんだ！」「そしてここにも」頂上から石をひとかけら拾いあげると彼は続けた，「また金雲母があるよ，これはきっとどこにでもあるもののようだね？」「広く流布しているね」ヤルノーが応えた，「君がこのようなものについて尋ねるのなら，今，君はもっとも古い山脈，この世界でもっとも初期に形成された岩の上に座っていることを覚えておくんだね。」「では世界は一度に創られたんじゃないの？」フェーリクスは尋ねた。「それは無理だ」モンターンは返した，「良いものには時間がかかる。」「ではあの下には別の岩があるんだね」フェーリクスが言った，「そしてあちらにはまた別の，さらにどこまでも別のものが！」そう言いながら，彼は近くから遠くの山々，さらには平地を指さした。

よい天気だった。ヤルノーはみなに素晴らしい眺望をひとつひとつ眺め

させた。あちらこちらに，彼らが立っているのと同じような頂きがあった。中ほどの山がこちらに迫るように見えたが，高さの点でまだ及ばなかった。遠くにいくにつれ平地になっていった。しかし奇妙な具合に再び突きでるような地形が現れていた。最後には遠く彼方に湖水や川が見え，肥沃な地帯がまるで海のように広がっていた。視線をぐっと引きもどすと，身の毛もよだつ谷底が見えた。いくつもの滝が凄まじい速さで流れおち，迷路のように入りくんでいた。

フェーリクスは飽きることなく問いつづけ，ヤルノーも嫌がらずすべての質問に答えた。しかしヴィルヘルムには，この教師がまったく誠実に真実を語っているようには思えなかった。そこで，じっとしていられない少年たちが再びよじ登りはじめると，ヴィルヘルムは友に向かってこう言った。「君はこうした事柄について，子ども相手だからと，自分自身に対して説明するようには語らなかったね。」「それが必要なときもあるのさ」とヤルノーは返した，「自分自身にだって，いつも思っているとおりに語るとはかぎらないし，他人にはその人が受けいれられることだけを言うのが義務ってもんだ。人間は自分に相応しいことしか理解しない。子どもたちの注意を目の前のものに引きとめ，彼らに名前や名称を伝えることがわれわれにできる最善のことさ。そうでなくても，子どもたちときたらすぐに理由を聞きたがるんだからね。」

「子どもたちを悪く言うわけにはいかないよ」とヴィルヘルムは返した，「誰だって多様な対象物には混乱するし，自分でその発生を解きあかすよりも，どこから？　どこへ？　と尋ねるほうがずっと快適だからね。」「しかしね」とヤルノーは言った，「子どもたちは対象物を表面的にしか見ないから，彼らと生成や目的について語っても，やはりただ表面的にしかできないんだよ。」「たいていの人間は」とヴィルヘルムは応えた，「一生，そのような状態のままで，平易なものが平凡でつまらなく見えてくる，あの素晴らしい時期に到達することはできないのだろうね。」「たしかに素晴らしいということもできるかな」ヤルノーは言った，「それは絶望と恍惚

の中間状態だからね。」「息子の話を続けよう」ヴィルヘルムは言った，「あの子のことが，目下，ぼくにはとりわけ気がかりなんだ。旅に出てからあの子は石を見ることを楽しむようになった。そこで，息子に十分に説明してやれるように，しばらくのあいだだけでも少しばかりぼくに教授してもらえないかな。」「それは無理な話さ」とヤルノーは言った。「どんな新しい分野でも，まずは再び子どもに戻ってはじめる必要がある。ものごとに情熱的に関心を向け，まずは表面的な部分を楽しみ，運がよければ，やがて核心に到達することになるんだ。」

「じゃあ，どうやって君がこのような知見と洞察を得るにいたったのかを教えてくれたまえ」ヴィルヘルムは言った，「ぼくたちが別れてから，まだそんなに長くは経っていないのだから。」「ねえ」ヤルノーは返した，「ぼくたちは永遠とは言わないけれど，相当な期間にわたって断念することを余儀なくされた。そのような状態で有能な人間にまず思いつくことは，新しい人生をはじめることだ。新しい対象では十分じゃない。それは気晴らしに過ぎないからね。新しい全体が必要なんだ。そしてすぐさまその真っ只中に身をおくのさ。」「しかし，どうして」とヴィルヘルムは口をはさんだ，「よりによってこんな珍しい世界，あらゆるもののなかでももっとも孤独な嗜好なのかい？」「まさにそれが隠者的だからさ」とヤルノーは叫んだ。「ぼくは人間たちを避けたいと思ったのさ。彼らは救いようがないし，自分自身を救うことすら邪魔をする始末さ。幸せなうちは，くだらぬことをやりたい放題させろと言う。不幸になれば，自分たちの愚行は棚にあげて助けろと要求する。ところが他人の幸不幸を尋ねることはしやしない。」「そこまでひどいこともないだろう」微笑みながらヴィルヘルムは返した。「ぼくは君の幸せを否定するつもりはないよ」とヤルノーは言った。「旅を続けたまえ！　第二のディオゲネス君。君のランプを昼間も消さずにおきたまえ！　あの下に行けば，君の前には新しい世界が広がっている。でもぼくは賭けてもいいが，それだって，これまでぼくたちが過ごした古い世界となんら変わりはないだろう。君が取りもち役を引きうけた

り，つけを払ってやらない限り，彼らの役にたつことはできないさ。」「でもぼくには，君の硬直した石よりは彼らのほうがずっと楽しく思えるがな」とヴィルヘルムは応えた。「それはまったく違うさ」ヤルノーは返した，「石を理解することが難しいというだけのことだよ。」[4)]

第 6 章[5)]

ふたりの友は，下の木陰で寝そべっていた子どもたちのところまで慎重に苦労しながらおりていった。モンターンとフェーリクスが集めた石の見本を広げる様子は，食べ物を広げるよりも熱心だった。フェーリクスはひっきりなしに質問し，モンターンはたくさんの石の名前を挙げた。モンターンがどんな石の名前も知っていることにフェーリクスは喜び，すぐにそれらの名を記憶した。彼は最後にもうひとつ石を取りだして尋ねた，「この石の名前は？」モンターンはそれをじっくり見て，驚いて言った，「おまえたち，これをどこから取ってきたんだ？」フィッツがすぐに返事をした，「ぼくが見つけたんだ，この土地のものさ。」「これはこのあたりのものじゃない」モンターンは返した。彼が困惑して疑っているのを見て，フィッツは喜んだ。「もし見つけた場所に案内してくれれば，1 ドゥカーデンあげるよ。」「朝飯前だけど」とフィッツは言った，「でもすぐには無理だよ。」「じゃあ，私が自分で探しだせるように，詳しく場所を説明してごらん。でもそれは無理な話だろ。だってこれは，コンポステルにある聖ヤコブ教会の十字石だもの。旅人が落としたものを，珍しく見えたものだから，君がかすめ取ったんじゃないのか。」「おじさんたちのドゥカーデン金貨はこの連れの人に預けておいてね」フィッツは言った，「ぼく，正直に

4）2 稿では，自然のアルファベットの読解についての会話が続き第 3 章が終わる。FA10, S. 291f. このような自然探求者としてのヤルノー = モンターンとの会話は，教育州での山祭りの場面（第 2 巻 9 章）でもあらたに追加される。

5）2 稿では第 4 章。FA10, S. 293.

この石をどこからもってきたのか白状するから。瓦礫となった聖ヨゼフ教会に，やっぱり崩れた祭壇があるでしょう。その砕け壊れた上石の下に，その土台になっていたこの石の層を見つけたんだ。そこから，手に持てるだけの石をたたき割ったのさ。上石を転がしてどければ，きっともっとたくさん見つけることができると思うよ。」

「金貨を取っていいよ」モンターンは言った。「君の発見はその値打ちがある。立派な発見だ。われわれが愛し崇拝する十字架の似姿を生命のない自然が創りだすなんて，喜んでいい話じゃないか。永遠の昔から決まっていながら，時間をかけてようやく実現する定めのものを，あらかじめ地中に隠しておくなんて，自然は巫女のようだね。その上に，つまり奇跡的な聖なる層の上に，司祭たちは祭壇を築いていたんだ。」

ヴィルヘルムはしばらく話に聴きいっていたが，いくつかの名称が何度も登場するのに気づき，以前に口にした自分の希望をあらためて繰りかえした。モンターンに，少年に最初に教えるために必要なだけの知識を自分に授けてほしいというのである。「諦めたまえ」とモンターンは応えた。「生徒たちが知るべきことしか知らない教師なんて，やっかい以上の何ものでもないさ。人に教えたければ，知っていることを言わないのが最善の場合もしばしばあるだろう。でも，生半可な知識ではだめだ。」「ではどこでそんな完璧な教師を見つけることができるだろう？」「簡単に出会えるさ」モンターンは返した。「どこで？」半信半疑でヴィルヘルムは尋ねた。「学びたいことのお膝元さ」モンターンは応えた。「最高の授業とは万全の環境から導かれるものなのさ。外国語は，その言葉が話されていて，それ以外の言葉が耳に入ってこない国で学習するのが一番じゃないのかね？」「つまり君は，山のなかで山の知識を得たってことかい？」ヴィルヘルムは尋ねた。「あたりまえさ。」「人間とつきあわずに？」ヴィルヘルムは尋ねた。「せいぜい山に精通する人間とだけだね」モンターンは言った。「鉱脈に惹かれた小人たちは，岩を掘りくずして大地の内部に入れる場所をつくり，どんな難しい課題も乗りこえようと努力している。知識欲にみちた

思想家はそういった場所に行かなければいけない。そこで行われていることを見て，生じるがままにさせ，成功も失敗も楽しむのさ。役にたつものとは，重要なものの一部にしかすぎない。ある対象を完全に所有し支配するためには，その対象をそれ自身のために学ばなければいけない。」

「そんな場所が近くにあるのかい？」ヴィルヘルムが言った。「だとしたら，フェーリクスを連れていきたいな。」「ひとつめの問いには，そうだと言えるが」モンターンは返した，「ふたつめはすぐに認めるわけにはいかないな。少なくともその前に，次のことを君に言っておかなければならない。フェーリクスは現在，おそらくはただ真似をする楽しみから，鉱石の虜になっている。しかしこの愛好以外の活動，他の知識，他の技術を彼のために探しだす選択肢だって，まだ残されているんだよ。」「もっとはっきり説明してくれないか」ヴィルヘルムが口をはさんだ。「じゃあ君に打ちあけるしかないな」とモンターンは続けた，「君は今，教育のユートピアと呼ぶに相応しい，ある地区のそばにいるんだよ。素晴らしいことは，完璧な環境においてのみ営まれ，教授され，伝承されうるという確信のなかで，そのようないくつかの教育活動の拠点が，広い範囲にいわば点々と植えつけられているんだ。どの場所も小さな世界にすぎないが，その限界のなかで模範的で，他の世界はすべて，大きな世界ですら，この小さな世界を模写し真似る必要があるくらいだ。」「君が何を考えているのか，ぼくにははっきりしないな」モンターンをヴィルヘルムは遮った。「すぐにわかるよ」とモンターンは応えた。「まず，この下の山中の金属豊富な大量の岩のまわりには，人間がこの貴重な自然資源をわがものにし，同時に一般的な概念を形成するのに役だつすべてのものが集められ，その結果，制御できない自然はそれだけいっそう快適に人間の目的にそくして管理されている。それと同様に，この一番下の谷において，広い草原の広がる平野の外部では，自然から人間に委ねられたまた別の重要な資源のための配慮が見いだされる。」「それは一体？」ヴィルヘルムは尋ねた。「馬だよ」モンターンは答えた。「あそこでは君をとり囲むすべてのものが，この高貴な

動物の飼育，飼料，成長について，また同時に利用の仕方について教えてくれる。この上で人は岩を砕き，掘り，よじ登るように，あそこでは，いわば大地から生まれでたかのような若い家畜に餌をやり，放牧し，駆りたて，導き，手綱をつけ，その上にとび乗り，さまざまな動きをしながら，あるときは自然に，あるときは技巧的に大地を駆けぬけること以上に，重要なことは何もないのさ。」

細心の注意をはらい近づいてきたフェーリクスは，突然叫んだ。「わあ，そこに行こうよ！　だってそれが一番いいじゃない，素敵じゃない。」「遠いよ」とヤルノーは返した，「それに，その途中で君はもっと感じのよい，もっと相応しいものを見つけるよ。」[6]「どんな種類の活動にも」と彼は続けた[7]，「子供というものは手を出したがるものなのさ，上手に営まれているものは何だって，とても[8]簡単に見えるからね。すべて始まりは難しい。これはある意味では真実かもしれない。しかしもっと一般的には次のように言えるだろう，すべて始まりは易しく，最後の段階を上りつめることこそもっとも難しく，もっともまれなことなのだ，と。」

それまで考えこんでいたヴィルヘルムは，モンターンに言った，「人間の活動のすべてが，実行するときも学ぶときもばらばらに分断されているという君の話は，本当なのかい？」「その通りさ，もっともなことだよ」とヤルノーは応じた。「人間がなすべきことは，第二の自我としてその人から分離されなければならない。第一の自我がそのことをしっかり呑みこんでいなければ，どうしてそれが可能だろう。」「しかし多面的な人間形成が非常に有利だとみなされてこなかったかい？」「そうかもしれないが」

6）下線部はすべて2稿ではカット。その代わり，前段落の続きとして「しかしぼくは，多くのことをいろいろ認知することであとになってようやく高められた最後にして究極のものについて語っているのであって，目の前にいる少年たちの場合，状況はまったく違うよ」（FA10, S. 294f.）があり，「どんな種類の活動にも［……］」に続く。

7）2稿ではカット。

8）2稿ではカット。

とヤルノーは返した，「なにごとにも潮時ってものがある。今は一面性の時代だよ。それを理解し，自他のためにこの意味で働く人間に幸いあれ。」[9]「ぼくの考えではそんなことはありえない」とヴィルヘルムは反抗した，「じゃあ，ぼくが息子のフェーリクスをしばらくのあいだ，そんな世界に呪縛しようとするなら，君はどの道を勧めるのか教えてほしいな。」「わかりきったことさ」とヤルノーは言った。「人間が何に対して能力があるかを簡単に言うことはできない。でも，ぼくなら，いつでも一番楽しいところを勧めるだろうね。この子をあの馬の調教師たちのところに連れていきたまえ。馬丁として始めることは，砕鉱夫として始めるのと同じくらい厄介なことだが，見通しは依然として明るく，最後には世界中を馬に乗って駆けめぐることだろう。

想像がつくように，ヴィルヘルムはまだいくつかの疑問を口にし，知りたいことがいくつもあったが，ヤルノーは彼らしく簡潔な説明をするだけで，最後にこう言った[10]。「なにごとにおいても[11] 下から上に向かって奉仕することが必要だ。ひとつの手仕事に自分を限定することが一番なのさ。どんなに頭の悪いやつでもそれはひとつの手仕事になるし，それより頭のよい者にとっては芸術であり，最高の頭脳の持ち主の場合は，ひとつをなしてすべてをなすことになる。もう少し矛盾のない言い方をすれば，彼は，正しく行なうたったひとつのことのなかに，正しく行われるすべてのことの比喩を見るわけだ。」彼は続けた，「君のフェーリクスをあの地区に連れ

9）2 稿では「人間の活動のすべてを［……］」から「［……］正しく行われるすべてのことの比喩を見るわけだ」までが一段落。「［……］働く人間に幸いあれ」までは表現の変更は多数あるが，ほぼ同じ内容である（FA10, S. 295）。

10）「ぼくの考えでは［……］」からここまでは，2 稿ではすべてカット。その代わり，オーケストラにおけるヴァイオリニストを例に挙げ，人類の一般生活において個人はひとつの器官となることが期待されている，というヤルノーの意見表明が続く（Ebd.）。

11）2 稿では in allem が überall（Ebd.）に変更。

ていって，幹部たちに会わせたまえ。彼らはこの子をすぐに判断して，もっとも有利なところに入れてくれるだろう。少年というものは，同じような仲間のなかにいるべきだ。そうしないと，自分で仲間を探すことになり，そこには追従者か暴君しか見つからない，ということになる。」[12)]

第7章[13)]

三日が過ぎたあと，わが諦念者たちの約束にしたがって，友たちは互いに別れを告げた。ヤルノーは，自分はこれから荒涼とした山岳深くに逃げいり，もう誰も自分を再び見いだすことはできないだろうと断言した。「ぼくたちの立場では，本当に信頼できる旧知の真の友人との再会以上に恐ろしいことはないね。ぼくたちは独りぼっちでいる限り，観察する価値のあるものは永遠だと想像する。しかししばらく人と話し，しかも心から話をしてしまうと，すべてがいかにすばやくくみ尽くされてしまうかを思いしらされる。馬鹿げたこと以外に永遠なものはない。分別のある人々はたやすく理解しあい，それでおしまいなのさ。さあ，ぼくは岩の裂け目に降りていって，無言のうちに岩と探求しがたい会話をしにいこう。」

「フィッツが君のあとをつけないよう気をつけたまえ」ヴィルヘルムはおどけながら応えた，「少なくとも今回は，彼は君を発見することに成功したんだからね。」「どんな風に始めたんだい？」モンターンは尋ねた。「結

12）2稿ではすべてカット。

13）2稿では第4章のまま続く。段落の冒頭に，「私たちはただスケッチ風に再現してみたが，このような会話が日没まで続いた」とあり，編集者としての語り手が初めて姿を現し，炭焼きがまを囲んでのヴィルヘルムとヤルノーの会話（初稿にはないヤルノーの幼年期，炭焼きがまの比喩，専門教育に入ろうというヴィルヘルムの意図），父子だけで巨人の城に向かい，そこで小箱を発見するフェーリクスのエピソード（初稿では第5章ですでに描かれている）が続く。FA10, S. 295–303. 初稿第7章冒頭4つの段落（下線部）は2稿ではカットされ（巨人の城の描写は2稿でも一部残っている），一行が大地主の所有地に向かう5段落目から，再び2つの稿は重なる。

局はただの偶然だったんだろう。」「そんなわけないさ」とフィッツは応えた，「ちょっとだけぼくの秘密を教えてあげるよ。山を愛好する男たちはどこでも，まるでそこらじゅうに金や銀が隠されているかのように，石のひとつひとつ，岩のひとつひとつを，右，左とたたいて歩きまわるでしょ。その跡をただ追えばいいのさ。どこかの角に最近砕かれた跡があれば，そこに男がいたという証拠なんだ。この追跡を続ければ，最後にはきっと彼が向かった場所をつきとめることができるよ。」フィッツは褒めてもらい，ご褒美をもらった。友たちは別れた。モンターンはひとりで，残りの四人は一緒に旅を続けた。ヴィルヘルムは次の目的地をすでに決めていて，人夫はその道をとった。しかし子どもたちは，途中で，フィッツがいろいろと語って聞かせた巨人の城を見ようと固く決心していた。フェーリクスは巨大な黒い柱，大きな門，地下室，洞穴，丸天井に強く惹かれていた。第二の発見，つまり，ひとつめよりももっと重要な発見を期待していたのかもしれない。

ひとつめの発見にいたった経緯を，彼は途中で父親に説明していた。好奇心から，彼はあの割れ目に降りていった。下にはかなり明るい空間があり，彼はそこで大きな鉄の箱を見つけた。箱は閉じてはいなかったが，ふたを開けようにも，ほんの少し持ちあげることすらできなかった。これを自由に扱うため，彼は父親に丸太を持ってくるように頼み，それをふたの下に支えとして置いたり，責め木としてあいだに挟んだりした。こうしてフェーリクスは，その片隅にあの小さな美しい小箱を見つけたのだが，それ以外は箱は空っぽであった。モンターンもその小箱を見せられたが，力を加えず，開けないままで保管するべきだという意見だった。というのも，小箱を開けるには非常に複雑な鍵を使用する以外に可能性はなかったのである。

荷物を運ばなければならない人夫は巨人の城への道を一緒に行きたがらず，歩きやすい小径をくだっていった。父と息子は苦労してフィッツのあとについていった。苔と藪のなかをくぐり抜け，ついに自然がつくりあげ

た柱の宮殿に到着した。それは瓦礫の巨大なかたまりの上方に，黒々と驚異の姿でそびえ立っていた。しかし目の前に現れたものにさほど注意を向けることもなく，フェーリクスはすぐにそれ以外の約束されていた奇跡の場所を探しはじめた。そしてそこに見るべきものが何もないとわかると，フィッツは，そうしたものは特定の日曜日と宗教的なお祭りのほんの数時間しか見ることができないのだと弁解するしかなかった。子どもたちは，ここには人間の手になる作品があると確信したままだった。しかしヴィルヘルムにはそれは自然の生みだしたものに思われ，これについてモンターンの意見を聞くことができればと望まずにはいられなかった。

さて険しい山道をくだり，すらりと天高く伸びた立派な唐松の森を通りぬけると，だんだんと木々もまばらになり，ついに明るい太陽の日差しを浴びて，ひとつの所有地が考えられるかぎりの美しさで彼らの視界に広がってきた。

それは広大な庭園で，もっぱら実りをもたらす菜園として活用されているようだった。果樹が豊かに植わっていたが，人々の視界は開けていた。土地は規則正しく植物の種類ごとに区画され，全体は斜面にあり，盛りあがったり沈んだり，多様な起伏を見せていた。そのなかにはいくつもの家屋が点在していたので，この土地は複数の所有者たちのものに思われた。しかしフィッツによれば，ただひとりの領主によって所有され活用されているという。庭園の向こうも見晴らすかぎり耕され，植樹されていた。湖や川の流れもはっきりと識別することができた。

人々は山をくだり，ますます近づいていった。そしてついに庭園に到達すると思ったとき，ヴィルヘルムははっとして立ちどまり，一方，フィッツは意地悪い喜びを隠さなかった。というのも，山のふもとの切りたった割れ目が彼らの前で口を開き，向こう側で先ほどまで隠れていた高い塀をつくっていた。内側は土を入れて完全に埋められていたが，外からは非常に険しかった。こうして深い堀によって，彼らは間近に眺めている庭園から隔てられているのであった。「中に入る道に辿り着きたければ」とフィ

ッツは言った，「ぼくたちはまだ向こうのほうへかなり遠回りをしなくちゃいけないよ。」「でも，ぼくはこちら側からの入り口も知ってるんだ。ずっと近道だよ。大雨のときに山水が庭園に流れこむのを規制する地下路が，こちらに開いているんだ。高さも幅も人が楽々と通るのに十分なのさ。」地下路と聞いて，フェーリクスはその入り口を降りてみたくてたまらなくなった。ヴィルヘルムは子どもたちのあとに続き，彼らは一緒に，この遊水路のすっかり乾いた高い階段を降りていった。わきの明かりとりから光が差しこんだり，柱と壁で遮られたりするたびに，彼らは明るみに出たり暗闇に包まれたりした。とうとう彼らはかなり平らな場所に辿りつき，ゆっくりと前進していった。すると突然，近くで一発の銃声が聞こえ，同時に隠されていたふたつの鉄格子が前後で閉まり，彼らはなかに閉じこめられてしまった。しかし捕らわれたのは全員ではなく，ヴィルヘルムとフェーリクスだけだった。というのも，フィッツは銃声が鳴るやすぐさま後方に跳びのき，閉まる格子は彼のたっぷりした袖しか捕らえることができなかった。彼は瞬時に上着を脱ぎすて，ためらうことなく一目散に逃げていった。

閉じこめられたふたりが驚きから立ちなおるひまもなく，人声が聞こえてきて，それはゆっくりと近づいてくるようだった。それからまもなくして，たいまつを手に持ち武装した者たちが，どんな獲物がとれたのか興味深々の目つきで格子のそばまでやって来ると，おとなしく降伏するかと尋ねた。「この状況で降伏するもなにも話にもならないでしょう」とヴィルヘルムは応えた。「私たちはあなたがたの意のままなのですから。むしろ，あなたがたが私たちを丁寧に扱ってくれるのかどうかと尋ねたいところですよ。私たちが身につけている唯一の武器を引きわたしましょう。」こう言って，彼は自分の猟刀を格子越しに差しだした。格子はすぐに開かれ，彼らは新参者たちを平然と連行した。ふたりは[14] まもなく奇妙な場所に到着した。そこは広々とした清潔な部屋で，蛇腹の下に続く小さな窓が，頑

14）2 稿では「らせん階段を上に連れていかれると」（FA10, S. 305）に変更。

丈な鉄柵にもかかわらず光を十分に取りこみ，室内を照らしていた。椅子，寝床，その他のほどほどの宿に期待できる調度はすべてそろっていて，ここにいる人間にとって欠けているのは，ただ自由だけに思われた。

ヴィルヘルムは室内に入るとすぐに座りこみ，事態をじっくり考えてみた。一方，フェーリクスは最初の驚愕から立ちなおると，猛烈に怒りを爆発させた。これほど険しい壁，高い窓，頑丈な扉，そしてこんな風に隔離され閉じこめられることも，彼にはまったく初めての経験だった。フェーリクスはあたりを見わたし，あちこち走りまわり，地団駄を踏み，泣き，扉を揺さぶり，拳で叩き，もしヴィルヘルムが彼をつかまえて膝のあいだに[15]抑えこまなければ，頭から扉に体当たりするところだった。

「さあ，落ちついてしっかり考えるんだ」父は息子に話しはじめた。「じたばたしても，この状況から逃れることはできないよ。謎はやがて明らかになるだろう。私がとんだ勘違いをしていなければ，私たちは悪人[16]の手に落ちたわけではあるまい。ここにある銘を読んでごらん。『無実の者には釈放と弁償を，誘惑された者には同情を，そして罪人には公正な処罰を』とある。ここから察するに，この施設は必然から生まれたもので，残虐な場所ではないさ。人間には，人間から身を守らなければならない理由が十分にある。悪意をもつ人は多いし，実際に悪事を働く者も少なくない。生きていくためには，いつも親切にするだけでは十分ではないんだよ。」

フェーリクスはまだしゃくりあげて泣いていたが，父の言葉よりもむしろ優しい愛撫によって，いくぶん落ちつきを取りもどしていた[17]。「おまえがまだ幼く，罪もないのに経験したことを，おまえがいつの時代に，どのような立派な世紀に生まれたかの生きた証として忘れずにいるがいいよ。

15）2稿では「力いっぱい」（Ebd.）に変更。複数見られるフェーリクスの描写の微妙な調整は，彼の年齢設定を引きあげたことによるものだろう。

16）2稿では schlecht が schlimm（Ebd.）に変更。

17）2稿では「フェーリクスは気を取りなおしていたが，すぐに寝床に身を投げ，それ以上意見も文句も言わなかった。父はやめずに話しつづけた」（FA10, S. 306）に変更。

罪人に対しても寛容に，犯罪者をもいたわり，非人道的な者にも人間的でいることができるまでに，人類はどれほどの道を歩まなければならなかっただろう！　このことを最初にみなに教え，その実践を可能にし，促進するために自分の人生を過ごした人々は，きっと神さまのような男たちだったのだろう。人間が美を生みだす能力をもつことはまれだが，善に対してはなおさらのことだ。だから，立派な献身的態度で善を促進しようとする人々を，私たちは尊重しなければならないのだよ。」

フェーリクスはこの慰めの言葉を聞きながら，父の膝の上でぐっすりと眠りこんだ。父が息子を用意されたベッドのひとつに寝かせると，ちょうど扉が開き，ひとりの恰幅のいい男が入ってきた。彼はヴィルヘルムを[18]しばらく愛想よく眺めたあと，彼が通常と異なる道を進み罠にはまりこんだ事情を本人に聞きだしはじめた。ヴィルヘルムは起こったことをありのままに説明し，身元を証明する二，三の書類を手わたした。そしてまもなく正式な道を通って反対側から到着するはずの人夫を証人に立てた。これらすべてがそこまではっきりとすると，管理人は客に対して，自分について来てほしいと丁重に申しでた。フェーリクスは起こしても目覚めなかったので，父は息子を眠らせたまま，この子をこれほど興奮させ激しく苦しめた場所から運びだした[19]。

ヴィルヘルムが管理人のあとについて美しいあずま屋に入ると，そこには飲み物や軽食が用意されていた。口にして元気を回復するようにヴィル

18）2稿では「この諭すような慰めの言葉は，彼らを閉じこめている人々の意図を完全に言いあてていたが，フェーリクスは聞いていなかった。彼は深い眠りにつき，ますます美しく，若々しく見えた。というのも普段はめったに襲われることのない苦痛によって，心の奥深くにあるものが彼のふっくらした頬に現れていたからだ。父は愛情を込めて息子を眺めて立っていた。そこに，ひとりの恰幅のいい若い男が入ってきて，彼は新参者を［……］」（Ebd.）に変更。

19）2稿では「かつて意識をなくしたオデュッセウスがされたように，部下たちが彼を丈夫な寝台にのせて外に運びだした」（Ebd.）に変更。

ヘルムに促すと，管理人は上司に報告するために部屋を出ていった。フェーリクスが目を覚まし，セッティングされたテーブル，果物，ワイン，ビスケット，さらには扉が開けはなたれて明るいことに気づくと，彼はまったく不思議な気持ちになった。外に出てはまた戻ってきて，夢を見ていたのかと考えた。こうしてまもなく，少年は，美味しい食事と気持ちのよい環境のおかげで，明るい[20]朝に前夜の悪夢を忘れるように，過ぎさった恐怖と味わったすべての苦しみをすっかり忘れてしまった。

人夫が到着し，管理人は彼ともうひとり，さらに愛想のよい男[21]を連れて戻ってきた。事情は次のとおり明らかになった。この土地の所有者は，まわりのすべての人々を活気づけ行動と創造へ導くような高次の慈善家で，彼の広大な苗圃から数年来，勤勉で注意深い栽培者には苗木を無料で，怠け者には一定料金で，それで商売しようとする人々にも同様に，安価で[22]譲っているのだという。しかし後者のふたつのグループも，無料で譲られるのがふさわしい人々と同じように無料提供を要求した。同意が得られないと，彼らは苗木を盗もうとし，いろいろなやり方でそれに成功した。これには所有者もうんざりし，さらに略奪されるだけでなく，急いで盗むために苗圃が台無しにされてしまったことにますます腹をたてた。遊水路を通って入りこんだ形跡が発見されたので，自動発射銃とあのような格子のわなを装備したのだが，銃はただ合図のつもりにすぎなかったという。あの小さい少年はいろいろな[23]口実にかこつけて何度も庭園で見かけていた。少年が大胆ないたずら心から，他の目的のために見つけていたあの道を通って，事情を知らない人々を案内しようとしたのはまったく自然なことだった。願わくば，あの子を捕まえたかった，しかし彼の上着は他の裁判関連の品々と一緒に保管された，ということだった。

20）初稿では heiter，2 稿では hell（FA10, S. 307）に変更。

21）2 稿では「初老の」ältlich（Ebd.）が追加される。

22）2 稿では doch（Ebd.）が追加される。

23）初稿では allerlei，2 稿では mancherlei（Ebd.）に変更。

こうしてヴィルヘルムは領主およびその家族と知りあいになり，非常に心のこもった歓迎を受けた。続く物語が彼らの関係について詳しく教えてくれるので，ここではこの家族についてこれ以上言うことはない[24)]。

［第 7 章終わり］

24）2 稿ではカット。「続く物語」とは，初稿第 8 章でヴィルヘルムがナターリエに送る「くるみ色の娘」を指し，この物語はレナルドー，叔母，ユリエッテ，ヘルジーリエという家族間での書簡のやりとりで構成される。

今回の試訳について

今回訳出したものは，初稿全18章の第5章から第7章である。これら3つの章は，2稿では第1巻の第3章の続きから第4章に改編される。『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』*Wilhelm Meisters Lehrjahre*（1795–96年。以下『修業時代』）で塔の結社の一員であったヤルノーは，今ではモンターンの名で，山岳地帯で鉱石の研究に熱中している。このヤルノー＝モンターンが近くにいることを知ったヴィルヘルムは，フェーリクスの遊び仲間フィッツの助けをかりて旧友を探しだし，遍歴者に許された3日間の会話を楽しむ。その後，彼らは別々の道を進み，マイスター親子は立派な所有地の整備された庭園に到着する。フィッツのいたずらで，親子は苗木泥棒と間違えられるが，ほどなく誤解は解ける。以上の大まかな筋書きは，初稿から2稿にそのまま引きつがれている。

さらに細かく2つの稿を比較すると，大きな変更点として次の2点をあげることができる（本稿末の対照表も参照）。

まず第1に，小箱発見のエピソードの挿入場所の移動である。初稿第5章で，ヤルノー＝モンターンを探すヴィルヘルムたちは，倒れた木々で道を塞がれ，立ち往生してしまう。そのとき，フェーリクスが洞穴のなかで古い小箱を発見する。この小箱発見のエピソードは，2稿ではヴィルヘルムたちがヤルノー＝モンターンと別れたあと，「巨人の城」と呼ばれる自然がつくりだした壮大な廃墟のような場所でのできごとへと変更されている（注3，13参照）。鍵のかかった小箱はフェーリクスに，そしてこの小箱の鍵は（後に明らかになるのだが）フィッツの上着のポケットに忍んでおり，両者がやがてヘルジーリエのもとに集まってくる今後の展開は，すでに初稿段階で確定している。しかし小箱のモティーフは2稿においてますますその意義と象徴性を高めていく。したがって，それに応じて最初の発見のシーンも，初稿のように2度に分けて（第5章，第7章）言及するよりも，より印象的な「巨人の城」に全体を移されたのではないだろ

うか。

より本質的な第2の変更点は，ヤルノー＝モンターンとヴィルヘルムとのあいだで展開する教育論における重点の移動である。『修業時代』続編のための現存する最初の補遺のなかには，ヤルノーの2通の手紙（テレーゼおよびフリードリヒ宛て，1796–98年成立と推定[25]）が含まれており，幼いフェーリクスの教育計画が示されている。フェーリクスの教育をテーマとする書簡体小説という最初の続編構想の片鱗が，今回訳出した箇所のヤルノー＝モンターンとヴィルヘルムとのあいだの子どもの教育をめぐる会話にも見いだされる。しかし，とりわけ2稿においてヤルノー＝モンターンの関心が，子どもの教育よりも，鉱石の研究と鉱山事業という自分自身の活動に大きくシフトしていることは明らかである。初稿においては，子どもの教育がふたりの会話の中心にとどまり，「教育のユートピア」として教育州をヴィルヘルムに紹介し，フェーリクスをその地区に連れていくように勧めるのはヤルノー＝モンターンの役割である。しかし2稿では，ヤルノー＝モンターンが教育州について話題にすることはなく（注6，12参照），鉱山になじみのあった自身の幼年期について語り，炭焼きがまの比喩を用いながら，一面性の時代における手仕事の重要性についてヴィルヘルムに説く（注13参照）。ふたりの会話の中心は，改稿によって，子どもの教育からモンターンやヴィルヘルムの専門教育へとずらされていくのである[26]。

25）WA29, S. 290ff; FA10, S. 839ff.

26）ヤルノー＝モンターンに代わり，2稿ではレナルドーが初めてこの教育機関のことをほのめかし（第1巻第11章），彼からの信頼厚い蒐集家がヴィルヘルムに教育州を推薦することになる（第1巻第12章）。蒐集家は教育州の理念を「あらゆる生活，行動，技術に手仕事は先行しなければならない」，「手仕事は限定されることによってのみ修得されうる」，そのため教育州では「あらゆる行動が区別される」と簡潔に説明し，ヴィルヘルムに「人間は自分の使命から外れ，喜んでまわり道をしたがるものですが，彼らはこのまわり道を短くしてくれる」と断言する。FA10, S. 413. これはヤル

初稿第6章と2稿第4章前半のふたりの会話をさらに詳しく比べてみる。いずれの稿でも，ヤルノー＝モンターンは，「多面的な人間形成」の時代は終わり，今や「ひとつの手仕事に自分を限定すること」に支えられた「一面性の時代」であると宣言する。この主張に対して，ヴィルヘルムはいずれの稿でも納得がいかない様子をみせる。初稿では，そのようなヴィルヘルムに対して，ヤルノー＝モンターンは，「ただ真似をする楽しみから」鉱石とたわむれる愛好的活動，つまりディレッタント的な活動で満足するのではなく，息子を教育州で，限定された小さな世界で学ばせるべきであると説得する。どのような分野がその子どもに適切であるかは，教育州の幹部たちが判断してくれるという。一方，2稿では，ヴィルヘルムははっきりと「しかしぼくは息子には限定された手仕事よりも，世界に対するもっと自由な視野を用意してやりたい」（FA10, S. 296）と反発する[27]。するとヤルノー＝モンターンは，炭焼きがまをたとえに，限定された手仕事はあらゆる世界につながっていると語りはじめ，ふたりの会話はフェーリクスの教育から離れ，ヴィルヘルムの専門教育へと向かっていくのである。具体的な内容は2稿の第2巻第11章のヴィルヘルムからナターリエ宛て書簡で明らかにされるが，ここでヴィルヘルムは外科医という特殊な手仕事につきたいと考えていることを旧友に打ち明けたことがわかる（FA10, S. 553ff.）。同じ手紙でヴィルヘルムは，友人の溺死という少年時代の思い出が，外科医をめざす原体験になっていることも綴っている。これは，今回訳出シーンの2稿追加部分である，ヤルノー＝モンターンが，砕鉱の少年たちと過ごした幼年期を鉱石研究者として生きる自分の原点とみなしている（注13参照）ことと重なる。

ノー＝モンターンの意見を繰りかえすものでもあり，決して教育理念そのものに明確な変化があるわけではない。

27）2稿において，『修業時代』以来のヴィルヘルムの特徴である，多方面にわたって関心をもつという彼の本質が再び強調されるようになる（第1巻第7章，第10章など）。

このように，ヤルノー＝モンターンとヴィルヘルムのあいだで交わされる教育についての会話の，初稿から 2 稿への変化――それは理念の変容ではなく，子どもの教育から成人の専門教育への関心対象の変化といえる――を認めるならば，2 つの稿でほぼ異同のない教育州（山祭りの場面を除く）も，実はその小説世界における意義の変容を免れないのではないかという推測が生じるが，その検証と考察は今後の課題となる。

初稿と２稿の対照表[28)]

	初稿		２稿
第５章	・ヴィルヘルムとフェーリクスはフィッツとともに山でモンターンを探す ・フェーリクスは洞穴で小箱を見つける（移動） ・ヤルノー＝モンターンとの再会 ・山頂での会話（巨大なものと感動；教育とその限界；絶望と恍惚の中間状態）	第１巻第３章の続き	・ヴィルヘルムとフェーリクスはフィッツとともに山でモンターンを探す ・ヤルノー＝モンターンとの再会 ・山頂での会話（巨大なものと感動；教育とその限界；絶望と恍惚の中間状態） ・自然のアルファベットの読解（追加）
第６章	・教育についての会話の続き ・多様性と専門教育の一面性 ・ヤルノー＝モンターンはヴィルヘルムに教育州を推薦する（削除）	第４章	・教育についての会話の続き ・多様性と専門教育の一面性 ・炭焼きのもとで夜を過ごす（ヤルノー＝モンターンの幼年期；炭焼きがまの比喩；専門教育に入ろうというヴィルヘルムの意志とヤルノー＝モンターンの支持）（追加）
第７章	・ヤルノー＝モンターンとの別れ ・フェーリクスが父に小箱発見の経緯を語る（移動） ・ヴィルヘルム，フェーリクス，フィッツは巨人の城を観察 ・大地主の所有地への道のり ・フィッツはヴィルヘルムとフェーリクスに秘密の通路を示す ・ヴィルヘルムとフェーリクスは捕えられる ・真相解明 ・所有地への招待		・ヤルノー＝モンターンとの別れ ・ヴィルヘルムとフェーリクスは巨人の城を観察 ・フェーリクスは洞穴で小箱を見つける ・大地主の所有地への道のり ・フィッツはヴィルヘルムとフェーリクスに秘密の通路を示す ・ヴィルヘルムとフェーリクスは捕えられる ・真相解明 ・所有地への招待

28）フランクフルト版およびミュンヒェン版の両稿対照表（FA10, S. 1274–1277; MA17, S. 1066–1069）を参照しつつ筆者作成。